

'94河合塾 第7回文化講演会

あなたは、日本文学、とりわけ『源氏物語』を頂点とする平安文学は、

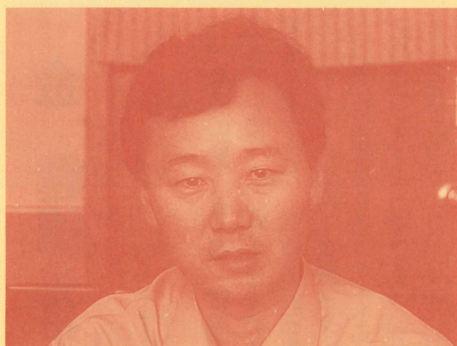
日本固有の文学であり、それ故、その奥深いところは日本の感受性を研ぎ澄

ますことによつてのみ捉え得るだろうと、何となく思っていないだろうか。

日本文学における韓文化

東アジアの中で平安文学を考える

講演 金鍾徳氏
（韓国外国語大学校 日本語科副教授）



金 鍾徳氏 プロフィール

1953年1月15日生まれ。1972年、当時、韓国内で唯一の日本語科があった韓国外国語大学校に入学、1976年卒業（文学士）。1980年には同じく韓国外大の貿易大学院を卒業（経営学修士）。韓国外大の日本語科講師を経て、1982年から6年間、東京大学文学部国語国文学科に留学。『源氏物語』の研究者として名高い秋山虔教授に師事し、1988年博士課程を修了する。1987年に韓国外大の日本語科専任講師となり、1990年助教授、1994年より副教授。

専攻は平安文学で、主な論文として、『源氏物語』の源泉、『源氏物語』の予言と物語の構想、『源氏物語』の日本的美学、『源氏物語』の継母子譚の伝承、『王権譚の伝承と『源氏物語』』などがあり、『源氏物語』を中心に据えた研究を進めておられる。韓国日本学会会員（現在、会員数は500～600名とのこと）。

ところで、現代韓国を代表する日本古典研究者は、『源氏物語』をどのように読み、そこに何を見出し出しているのだろうか。自国の文学とどう違い、何を同じくすると見ているのだろうか。

中国と日本の間に位置する地点から日本の平安文学を見るその視点は、これまで日本の研究者・文学者に見えにくかったものを新しく照射して

くれるだろう。

『古事記』『風土記』『万葉集』という上代の作品にとどまらず、『古今集』『伊勢物語』『大和物語』そして『源氏物語』という平安文学の中核となる作品を取り挙げ、それらの作品の中で、韓文化はどのようにに受容され、どのように描かれているか、具体的に文章を引用しながら、分かりやすく話を展開していく。

日時／10月21日（金） 17時30分より

会場／河合塾福岡校711教室

主催／河合文化教育研究所

入場無料

金 鍾徳 先生との出会い

竹国友康（河合塾現代文講師）

一年前の夏、ぼくは、韓国の映画評論家と会うためにソウルにきていた。こちらの方はあらかじめ連絡がついているので不安はなかったが、同僚の武田先生や山崎先生が企画する河合塾のサテライト講座「基礎古文」で、日本の古典を研究する外国人研究者を紹介するコーナーに登場してもらえ、韓国の若手研究者とコンタクトをとるというもう一つの目的は、現地で動いてみるほかなかった。手元には、東京外大朝鮮語学科の先生から紹介を受けた、日本古典専攻の研究者数名の大学勤務先リストがあるばかりである。

さてこの先生から連絡をとろうかと思案したが、手元の連絡リストの中に「韓国外国語大学・金鍾徳（キム・ジョンドク）先生」とあるのに目がとまった。ぼくの勉強しはじめたばかりの韓国語入門書の著者が、韓国外国語大学に留学していたというとも思い起こされた。「この人だ！」と思った。何度か頭の中で韓国語会話を反芻して受話器をとった。ぼくの語学力不足から手間どったが、大学事務局からようやくキム先生へと電話がつながった。用件を話すと、「私の方からあなたのいるホテルに向きます」と穏やかで明晰な日本語が耳元に響いてきた。こうして、キム先生の大きな度量に甘えて、それ以降ぼくたちはさまざまな無理難題をお願いすることになる。

その後の交流のなかでも、「東アジアとの関わりにおいて日本の古典を研究する」というキム先生の壮大な方法論の話はとくに印象に残っている。日本という枠組みを自明のものとし、その枠内ではかものを考えない従来の古典観の「狭さ」と、にもかかわらず日本の古典作品それ自体がその枠を超えて「普遍性」をもち続けていることを教えられたような気がして、門外漢ながら深い感銘を受けた。このような発想へと自らを開いていくことこそが、どのような分野であれ、二十一世紀に歩みでようとしている日本、いままとも求められている現在の課題だとも思えたからである。キム先生にひき合わせてくれたカミサマにカムサハムニダ（感謝します）。

隣の国で考える日本古典文学教育

金 鍾 徳

一、日本古典文学との出会い

大学の日本語科で日本語・日本文学を専攻するようになって、常に言葉というものはそれ自体が長い歴史をもっているから、その言葉を生んだ文化が分からないと、言葉のほんとうの意味は理解できないと考えてきた。私が日本の古典文学に興味を持つようになったのは、このような日本文化の源泉に対する素朴な疑問からであった。

それから初めて日本の古典文学に接したのは日本文学史の時間であった。平安時代になって仮名文字が自立し、和歌、物語、日記、随筆などの女流文学が形成されたのは、まるで韓国の朝鮮時代にハングルで書かれた女流文学が盛んになると全く同じパターンであった。それで、私は仮名文字で書かれた優雅な平安時代の女流文学や中世の随筆などを先生の解説とともに聞いて王朝文学の美意識に深い感銘をうけたのである。

二、韓国の大学における日本古典文学教育

韓国では全国の四年制の大学、百余校のうち四十余校に日語・日文学科が認可されていて、たいいていの大学に日本文学史、古典文学関係の講座が設けられている。

韓国の学生にとっては現代日本語さえ難しいのに、日本の古典を分かりやすく理解させることは至難のわざである。ところで、難しい古典を易しく教えることはなかなかできないことであるが、興味のそえられる場面を教えることはできると思う。

例えば、『古事記』の場合はまず序文を読ませて、『古事記』が完成するまでの過程と、上代のいわゆる万葉仮名がどのようにして成立したのかを、新羅の吏読文字と比較しながら説明する。それから、天孫降臨のところとか、神功皇后の新羅親征、応神朝の百済文化の渡来などを『三国遺事』と比較しながら読ませている。

『竹取物語』、『土佐日記』の場合もやはり冒頭の場面を読むと、文学史的に仮名文字の発生とか物語文学の誕生などを理解する上で全体像をつかみやすい。

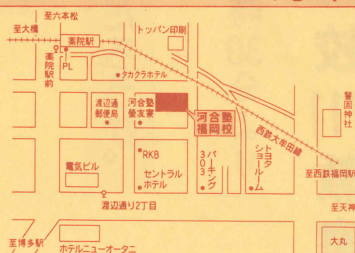
また韓国の大学生にとっては難解な『源氏物語』でも「高麗人」という語がテキストに出てくると興味をそえられるようになる。それで桐壺巻の高麗の親相家が若宮（光源氏）の運命を予言する場面を読んで、主人公の登場と栄華の運命を説明する。

『宇治拾遺物語』では巻第十二の十九話「宗行が郎等虎を射る事」とか、巻第十四の五話「新羅国の后金の櫛の事」などを読んで古代における韓日両国の人物の往来を確認させる。これらの話を読んだ学生は『宇治拾遺物語』のことをけっして忘れないだろう。

（筑摩書房「国語通信」一九九三年秋号より一部抜粋）

河合塾福岡校

〒810 福岡市中央区渡辺通4の2の11
TEL (092) 714-0581代



河合塾 福岡校	徒歩8分	地下鉄天神駅 西鉄福岡駅
徒歩2分	渡辺通2丁目	バス
徒歩5分		西鉄薬院駅
徒歩8分	天神	地下鉄
徒歩2分	渡辺通2丁目	バス
徒歩5分	薬院駅前	バス